

死にゆく者の最終段階における希望について：
トルストイ『イワン・イリツチの死』を手がかりに
して (概要)

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芳賀, 直哉 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00006833 |

死にゆく者の最終段階における希望について

—トルストイ『イワン・イリツチの死』を手がかりにして— (概要)

芳賀直哉

(1) 『イワン・イリイチの死』がもつ普遍の意味

周知のとおり、この小説の作者トルストイ(一八二八年—一九一〇年)はロシアの名門貴族の一員であり、大地主の四男として育った。かれの作品の中では短編と言ってもいい『イワン・イリイチの死』は、一八八四年かれ五六才のときの作品である。テーマは「死」である。しかも、主人公イワン・イリツチ、順風満帆の人生途上の「ちよつとした事故」に因ってdying man(死にゆく者)である。主人公自身の死についての想い、家族や同僚の取り繕われた偽善・無関心、信心深い下男の素朴な宗教心、最終的な和解など、人間精神の普遍的な姿を描いてあますところのない名作である。

- ・ 同僚の態度
- ・ 家族の心境
- ・ イワン自身の悲嘆のプロセス

(2) イワン・イリッチに代表されるわたし自身の死

ジャンケレヴィチの言う「三人称・二人称・一人称」の三様の死を援用すれば、この小説は一人称の死＝わたし自身の死を克明に描いている。

(3) キューブラー＝ロスの有名な「五段階のプロセス」との類似

キューブラー＝ロスの『On Death and Dying』（一九六九、邦訳『死ぬ瞬間』一九七二）には、各章にインドの詩人タゴールの詩句が掲げられているものの、『イワン・イリイチの死』への言及は見られない。しかし、だからと言って、彼女がこの名作を読んでいなかったことにはならない。二〇〇名余の dying persons へのインタビューに基づく分析手法によって五段階プロセスを提起した。

(4) 受容の最終段階のデカセクシス (dekasexis) とプロセス全てに伏在する「希望」

キューブラー＝ロスの上記著書では、「否認」「怒り」「取引」「抑鬱」「受容」が悲嘆のプロセスの五段階とされる（チャート図では「取引」と「抑鬱」が入れ替っているが）。しかし、「希望」という、プロセスの初めから終わりまで継続する事柄に一章が割かれている。また、受容期の最終段階での「デカセクシス」（脱執着）の心境を特記している。

(5) 『イワン・イリイチの死』における「デカセクシス」と「希望」

小説の最終部分で、主人公は「死の恐怖はなかった。なぜなら死がなかったからである。死のかわりに光りがあった。」と感じている箇所がある。その直前には、臨終の懺悔と聖餐に与った主人公が「一瞬間、希望が彼を訪れた。」

彼は治療の方法を考えはじめた。再び生に対する希望が現れた。」と、病気が治る期待を抱く様子が描かれている。

(6) 身近な者の死の意味

死そのものにはありふれた出来事であり、だから三人称的死は日常である。しかし、二人称的死はもはや「ありふれた日常」ではない。まさに日常の底に口をあけた深淵である。深淵の大きさ・深さは、愛する者を死なせた状況や様態によって大きく相違する。老衰でいのち尽きた高齢者の場合と、幼子を自分の不注意から死なした場合には、同じ二人称の死と言っても、残された者の見る深淵は違う。一般的に、トインビーが『死について』で言っているように、「死者にとってもっとも苦痛の少ない死は、残された者にとっては最も大きな苦痛となる。」は確かであろう。

(7) 死を前にしての「希望」とはどういう希望か

- ・ 長年胸に秘めてきた苦衷（家族関係や仕事上の秘密など）が解消すること
- ・ 治る可能性としての希望
- ・ 宗教的希望

（はが なおや 静岡大学大学教育センター）